

## 2.2. 質問法調査について

西 平 重 喜

§ 目的 質問詞法で、質問形式によつて答が変わらないかどうかをしらべ、妥当な質問形式をみつけること。今度の調査では、予算その他の条件から区立の中学校2年生を対象とした。

§ サンプルング 区立中学校をその所在地によつて12層に分け、各層から中学校の2年生の生徒数に比例して、中学校を第1次抽出し、各校には層の生徒数に比例した *real sample* を割当てた。第2次抽出として各校の *real sample* が確保できるだけの学級を抽出し、この *actual sample* から、*systematic* に *real sample* を抽出した。なお *real sample* の総計は、7008人。

§ 調査項目、方法 第一部では生徒の学力として、数学の問題を15分間；第二部では態度調査を13分間；第三部では態度の強度の調査を20分間に分けて行った。

方法としては、各生徒に同じ内容の問題を、自由回答法、選択肢法、あるいは正否法などに *split* して與え、*group* 毎に比べる。なおこのほかに選択肢の順序 (*Choice order*)、質問の順序 (*Question order*)、誘導質問 (*biased Question*) などの研究もできるように組合せた。このほか田中B式知能検査、付帯調査などを行なつて、結果分析の手かかりとする。

§ 信頼度調査 本調査12校のほか、ある中学校で1ヶ月をおいて *test-retest* による信頼度調査を行なつた。このとき *test*, *retest* に共通の *sample* は95人で、これが *split* によつていく組かに分かれるので、積極的な結果は得られない。ここでは分析は第一部おけについて行なつてある。

つぎの結果は有意差があるとは、いい切れないものもふくんで

いる。

- 1° 各問とも retest の方が test のときより少しづつよくなっている。
- 2° test, retest の相関係数は各問を通じて 0.40 ~ 0.85 で、自由回答法、選択肢法、正否法の順で高い。
- 3° 解答の安定性は、自由回答が一番高く正否法が一番低いようである。
- 4° 正答は、正否法が一番低い。

追ってくわしい結果は“統計数理研究輯報”に報告する。

### 2.3. 学校調査について

青 山 博 次 郎

昭和26年度の研究として、(1) 全国教育課程調査の分析、(2) 質問法の研究を行った。

先ず(1)については既に輯報第5号に報告したが、その概要は次の通りである。

1. 回収は平均して8.5割であつて、無回答校について種々の既存の資料と比較し回答校のみにて分析し得られることを示した。
2. 層別の効果を類型について調べた。
3. 類型に及ぼす各種の条件を分析したが、決定的な要素というものは見られなかつた。
4. 類型を推定するため、各種の条件の数量化の方法を考案した。結論的には観察調査の結果の分析に俟たねばならないこと、未だカリキュラムの評価について時期尚早というよう后ことが考えられる。